

- 8) *De Trinitate* XV. 16. 25. Quapropter ita dicitur illud Dei Verbum, ut Dei cogitatio non dicatur.....
- 9) *Ibid.* XV. 11. 20. Animaduertenda est in hoc aenigmate etiam ista Verbi Dei similitudo, quod sicut de illo Verbo dictum est, "Omnia per ipsum facta sunt", ubi Deus per unigenitum Verbum suum praedicatur uniuersa fecisse; ita hominis opera nulla sunt, quae non prius dicantur in corde: unde scriptum est, "Initium omnis operis uerbum" (*Eccli.* 37. 20).

* * *

討論報告（司会者）

泉 治典

アウグスティヌスはミラノのヴィジョンやオステシアの体験において上からの声を聞くという神秘を経験した。それは「心に聞かれた言葉」である。これによってアウグスティヌスの思索は、「見る」に代わって「聞く」ことを超越者との関わりの第一与件とするに至った。すなわち、アイデアの野を思考の場所として持つことに対して、知と生を人格的關係性のうちに構築することとなったのである。発表者加藤武氏は長い間この問題をめぐって思索を続けて来られ、昨年『アウグスティヌスの言語論』（創文社）を刊行された。そこでは意味の光、喚びかけ、沈黙、対話、讃美、呻き、告白等〈声の現象学〉が探究され、さらに比喩論と解釈学が展開された。加藤氏はアウグスティヌスの著作の中に直接伝達ではなく間接伝達（キルケゴール）を見、テキストを通して対話しつつ、導かれて自らも天上の声を聞こうとする姿勢を示された。かつフッサール、ソシュール、デリダ、ヤーコブソンらの言語哲学とも折衝して、哲学の今日的営みを披瀝されたのである。

今回発表の題目〈sonus et verbum〉は、*De doctrina christiana* I, 12「われわれが話す時、心に抱くものが肉の耳を通して聞き手の心の中に滑り込む。すると心に抱く言葉が音声となって (fit sonus verbum), 発語と呼ばれる」から採られた。'et' はたんなる並列ではなく、同一・差異・類似・非類似を含意する。初期の作 *De fide et symbolo* では神の言と人間の言葉との差異が強調されたが、それから3年して書かれた *De doc. chr.* I では、受肉による神の言の人間音声における現在が説かれた。これは神の言と人間の言葉との質的差異を破棄せず、むしろアナログアをおくものであ

ることを、加藤氏は多くのテキストでもって示され、そして最後に *De trin.* XV, 20 にあらわれる 'Est, est; non, non' について論じられた。アウグスティヌスはマタイ 5, 35 のこの句を、「存在の光の彼方から語りかけられた声を聞く」ことで受け取ったのだ、と加藤氏は結論された。これは心理的ならざる神秘体験であり、対話の存在論的根拠を開示するものとされる。

この発表について水落健治氏のコメントが出された。それはアウグスティヌスの初期・中期の言語観へのストア派の影響を明らかにしたものである。75年くらい B. D. Jackson や H. Reuf によりアウグスティヌスの *De dialectica* の校訂・翻訳・注が刊行されたので、これによってその影響を詳細に論ずることができる。結論としては、ストアの音声中心の言語観が修正され、言葉を構成するモメントとして「意味」が重視されたこと、つまり聴者を動かすものに音声とならんで意味があるとされたこと、またストア派のエテュモロジーへの批判があるが、それはメタ言語への着目に由来する、等が示された。この結論は、加藤氏が言葉の超越的レベルを問うたことと同じではないが重なるものを持つので、特にメタ言語への着目があるという点に加藤氏は同意された。

続く質疑を要約すると、sonus と vox とはどう区別されるか（萩野氏）、語ると聞くとの関係の中での信の位置について、また真理の了解と信との関係について（柴田氏）、意味の把握や注解作業の中で intellegere とならんでなお聞くことが必然であるか、受肉の保証がなければ intellegere は成立しないのかどうか（岡部氏）、見ることと考えることの彼方に声を聞くという超越的事実をどう理解すべきか（片柳氏）、テキストが音読を必要とするのはどういう場合であるか（八巻氏）。最後に司会者が、ストア派の影響は mendacium をめぐる議論の中にもさぐられるべきこと、普遍論争は原始言語への関心を次第に消して行ったかもしれないが、その関心が取り戻されて言語哲学を活発にするという事実が哲学史上見られると指摘した。このようなことで、加藤氏がまとめとして言われた「言葉の二重性」が多くの方の関心を喚起し、活発な討議がなされたことを喜ぶたい。